
カメレオン 2

星宮夕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カメレオン 2

【Nコード】

N7510R

【作者名】

星宮夕

【あらすじ】

前回の続編です。

連載小説にしたいのですが、最初のが短編にしてしまったのでしゃーなしとします。

(前書き)

今回は短いです。

彼女は翔の姉には見えなかった。ロングの黒髪にピンクのピンで前髪をとめていて、左目には泣きホクロがあった。黒いハイネックの服にチェックのひざより高いスカート。顔立ちも整っていてモデルでもやればいいのではないかと思うほどだった。

「あんたさ、友達少ないでしょ。」

翔と同じだった。少し女口調がはいってはいたもののそこには翔のおもかげがあった。

だから。だからなのかもしれない。涙がこぼれていた。そして俺は目の前にいる彼女に抱きつき、本気で泣いていた。私がこれほどまでに泣いたのは今までになかったし、女子から張り手をくらったのも初めての事だった。

「はい。コーヒー。」

そういつて彼女は俺に缶コーヒーを渡した。

「俺の金なんだけど。」

「あなた、さっき私に抱きついたでしょ。」

「・・・」

「その代償だと思えば、安いものだと思わない？」

「なぐられた・・・。」

「なぐったんじゃないわよ。ぶったのよ。」

結局同じじゃないか。などと思ったのだが、反論するとまためんどくさくなりそうだったので、それ以上は何も言わなかった。

「でさ、さっきは翔のために泣いてくれたんでしょ？」

「まあね。」

「ありがとう。」

そう言った彼女に顔はどこか悲しそうでそして、今の自分の悲しみを忘れさせてくれるほどに彼女を守りたくなった。

「私ね、裕子っていうんだ。」

「知ってるよ。」

「そっか。同じ学校だもんね。それじゃあさ、ひとついいかな？」

「何？」

「私と友達になってくれない？」

なにも言えなかった。多分この時、自分は言葉を失っていたのだと思う。

「じゃあ。OKね。」

そう言った彼女と翔を照らし合わせた自分が、この時はものすごく情けなかった。なぜなら、自分はまだ翔の死を認めたくはなかったのだから。

「おはよう。」

そんな風に学校で声をかけられたのは初めてだった。今日は2月5日。特に何もない肌寒い日だ。朝、カーテンから覗く太陽の光に「なぜお前はそう毎日毎日上るのか」と愚痴をこぼしながら、朝食のトーストを口の中に詰め込み、牛乳で流し込んだ。母はそんな私に「あんたはいつもぎりぎりね。やることないのになんでそんなに起きるのがおそいの？」

などと言ってきたため、少しイライラしながら

「やることがないからじゃない？」

と答えると、母は

「奇遇ね・・・、私もよ。」

と言ってきた。言い返す気にもなれなかった。

おっと、話を戻そうか。

「おはよう。」

としか言い返せなかった。というより他にいう単語が見つからなかった。

そんなおどおどする俺に彼女はいった。

「いいのよ。それで。」

「しかし、なんで俺なんかに話しかけるんだ？」

「あなたの、友達だからよ。」

また何も言うことがなくなった。

「じゃあ、また教室で。」

そういうと彼女は腰まである髪をふさふさと動かしながら走っていった。

「うっす。」

などと小さく声をもらして教室に入った。これはいつの間にか俺の日課になっていた。

まあ一度も返事が返ってきたことはなかったのだけれど。

そういつて自分の席に着く。俺の席は先日の席替えで窓際後方3番目というなんとも微妙な席になった。

まあ、あまり気にはしないのだが。鞆を隣にかけ、少し空を見ていた。

「今日もまたカメレオンか・・・。」

思った言葉が口に出てしまった。まあ、不可抗力なのでしょうがないか。

そんなことを考えながら、迷彩服を身にまとい、爬虫類のように身を振じらせながら、人という物体の影に溶け込んでいくのであった。そして、その影の中には真実などないことも、ずっと前からわかっていた。

それは昼休みの出来事だった。いつものように人の隣に見えない壁を感じながらすごしていると、最近聞いたばかりの新しい声が俺の耳に届いた。

「ほんとにカメレオンみたい。」

クスクスと笑いながら彼女はそう答えた。

「うるさいな。いいだろ、別に。」

「よくないわ。友達だもの。」

今考えてみると俺はこの時、自分の予想をはるかに超えた恐ろしい

顔をしていたのかもしれない。
なぜなら、彼女の顔が見たこともないまでにゆがんでいたからである。

カメレオン2

完

(後書き)

最近動いてもないのに肩がこります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7510r/>

カメレオン 2

2011年10月8日22時28分発行